

EDI Program for Global Leaders

In 2022, Ochanomizu University was selected by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) for its “Inter-University Exchange Project” and launched the EDI Program for Global Leaders. This program fosters global leaders with EDI through six months of studying in Japan from a partner university in the UK, Australia, Canada, or the U.S. as well as an internship in English.

※ Refer to https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/

Ochanomizu University

Center for International Education
EDI Project Office



Student Service Building 3F
2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610
E-mail: ocha-edi@cc.ocha.ac.jp

EDI Program for Global Leaders



FY2024 FINAL REPORT

EDI Program

2024年度春季UTS海外短期研修報告書

FY2024



Ochanomizu University

シドニー工科大学短期研修

研修期間：2025 年 2 月 28 日～3 月 9 日（10 日間）

研修テーマ：EDI 短期研修、多文化主義、ジェンダー

目次

1. UTS 短期研修レポート1

生活科学部 食物栄養学科 1 年 有木1

文教育学部 言語文化学科 2 年 鈴木3

文教育学部 言語文化学科 1 年 田中6

共創工学部 文化情報工学科 1 年 戸川.....9

文教育学部 人間社会科学科 2 年 檜山.....13

文教育学部 人文科学科 2 年 福家15

文教育学部 言語文化学科 1 年 山井17

2. シドニー工科大学における発表資料21

“Gender Diversity of Japanese Education” - Suzuki and Togawa23

“Multicultural Coexistence in contemporary Japan” - Yamai and Ariki26

“Women’s University and Education of Women” - Hiyama and Nomoto28

“Cross-Cultural Marriage and Integration: Building a Harmonious Society” - Fuke and Tanaka.....31

1. UTS 短期研修レポート

生活科学部 食物栄養学科 1年 有木

1. 自身の学問的な学び（評価点・改善点）

オーストラリアは多文化主義で多くの言語が存在しているが、その多くが消滅しつつあると学んだ。みんなが同じ言語を話した方がいいのか、地域独自のなまりを消すソフトウェアがあれば偏見や対立が一掃されるのかについてのディスカッションを通して、言語の多様性の重要性を学んだ。3月5日は International woman's day で女性リーダーについての講義を聞いたりディスカッションをしたりした。ジェンダーについては自分の専門外で話の内容についていくので精一杯だったため、もう少し下調べをしておけばよかったと感じた。7日のプレゼンテーションで、私は現代日本の多文化共生について発表した。日本では多文化共生のために外国人労働者をサポートする日本語学校があったり、意思疎通をはかりやすくするためにやさしい日本語を使ったりする。しかし未だに労働搾取や公民権の不平等、文化的・教育的支援が行き届いていない部分があるので、それらの解決が今後の課題だと感じた。北海道教育大学のプレゼンテーションでは、日本の難民、外国人労働者の問題やアフリカ系の人に対する日本社会の態度について学んだ。日本はそれらに対して否定的だが、日本が現在抱えている少子高齢化問題や年々増加する在留外国人数を考えると、対応の仕方を変えなければいけないと感じた。

キャンベラのフィールドトリップで戦争記念館を訪れたとき、日本の攻撃についても言及されていて心が痛んだ。国会議事堂に行ったとき、ガイドの方からキャンベラを首都にしたことによってアボリジニが立ち退きされた話を伺った。そして国会議事堂の前にアボリジニのテントがあるのは、自分の領地であることを国に主張しているためだと知った。

2. 自身の国際交流面について（評価点・改善点）

UTS の学生がいろいろな場所に連れて行ってくれた。私が相手の英語を聞き取れなくても、ゆっくり話してくれたり分かりやすく言い換えてくれたりした。オーストラリアにはスラングがあると知り、それを聞き取るのは難しかった。英語の授業では、話の内容を理解してディスカッションすることが多く、自分のリスニング力やスピーキング力が足りていないことを実感した。日本語の授業では、参加していた UTS の学生がみんな日本語が上手で驚いた。日本の漫画や音楽が好きで日本語を勉強し始めたという人が多く、日本ではマイナーな漫画や音楽を知っている学生もいた。7日の英語のプレゼンテーションでは、事前に練習したかいがあり、スクリプトをほとんど見ずに発表できた。しかし質問されたときに上手く英語で答えることができなくて悔しかった。自分の回答が質問に合致してい

るか不安だったため、授業後に質問者のところに行って回答し直し、最終的に互いに納得できた。

ホテルの朝食や店に行ったときは、向こうから How are you?などと言われることが多く、日本より距離感が近いことを実感した。店の商品についてわからないことがあったとき、英語で質問したら丁寧に答えてくれた。滞在中にいろいろな場所に訪れ、日本では見ない建物や景色に圧巻した。また私はグルテンフリーに興味があるため、グルテンフリーのベーカリーに訪れた。店内にはパソコンを開いて作業している人や友人同士でお茶をしている人がいて、店の雰囲気は日本にもあるようなカフェに似ていた。しかし売られているものはグルテンフリーだけでなく、デイリーフリー、エッグフリー、ヴィーガンなどたくさん種類があり、それらが一つひとつ値札の脇に記されていた。理由があって特定のものを食べることができない人でも、安心して食べられるような配慮がきちんとなされていて驚いた。さらにスーパーではグルテンフリーのブースがあり、パスタやクッキーなどが売られていた。日本よりもオーストラリアは、グルテンフリーに対する意識が高いなと感じた。

当初はこの研修に参加するか物凄く悩んだが、海外でしか経験できないことや新たな発見もあり、いい思い出になったので参加してよかった。

1. 自身の学問的な学び（評価点・改善点）

短期研修中の授業で学んだことの中で興味深かったこととして、Intercultural communication の授業では、①translanguaging やネイティブスピーカー主義についてが、Japanese Language の授業では②オーストラリアの多文化主義や環境保護について③その他が挙げられます。

1. 授業の中でのディスカッションの中で、translanguaging とネイティブスピーカーの例を聞くことができました。Translanguaging については、反射では母語が出てしまうこと、難しい単語は母語を用いることが、ネイティブスピーカー主義では、コールセンターでアフリカの英語を話すのをやめてネイティブ風に話すようにしたら、顧客からの信頼が上がり仕事が評価されるようになったという事例を聞かせてもらった。これらは、たくさんの言語が入り混じる国ならではの問題だと感じたため、非常に興味深かったし、今後日本もグローバル化が進んで文化や言語が混在していく中で、重要になってくる問題であろうと思いました。
2. Any topic の場面で、知りたいと思っていた、オーストラリアで暮らす人にとっての多文化主義とは何か、どのように考えているのかについて聞いてみたところ、当たり前だから考えたことないし、勉強もしないと話してくれました。私がオーストラリアに来てから感じていたのは、自分がマイノリティだと感じるということがないということで、それが多文化主義の実現を体現しているのかと思っていましたが、まさに人種は気に掛かるポイントではないということなのかもしれないと思いました。また、この授業より前の交流で私の話した多くの学生が、話しているうちに英語が母語ではないがわかり、どのように英語が身につけているのかについて気になったので聞いてみたところ、小学校などでの関わりの中で何気なく身につけて、「英語を習得する」という感覚はなさそうに見受けられました。マルチリンガルの多い社会だからこそ、物事を見る視点も豊かであり、活気のある社会が実現されているのではないかと感じました。オーストラリアの SDGs に対する考え方について興味があったので聞いてみたところ、オーストラリアでは SDGs は政府の決め事のようなイメージで、SDGs というより、環境保全という意味合いから、さまざまな場面で導入されている考え方であることがわかりました。例えば、ファッション専攻の学生は、ファストファッションやウェイトレスな作りについて学んでいたり、建築の専攻の学生は、カーボンの少ない建築について学んでいるようでした。
3. そのほかに、観光を通して学んだこともいくつかあります。オーストラリア博物館では、「カントリーという時に、ファーストネーションだけではなく環境についても考えよう」との文言を見つけ、それほどまでにファーストネーションに対する考え方が

大きいものであることを感じました。UTS の学生の何人かも、IC の先生も、True owner と話していたし、高校生の時にプレゼンをするなどして学ぶと話していたので、本当に浸透していると感じました。また、アンザックメモリアルでは、戦争に対する描かれ方の違いを感じました。戦争記念館というと、日本では「戦争は残酷で2度と起こしてはいけない」というメッセージがひしひしと感じられる展示が多いですが、この記念館では、戦争関係者を評価する、といったスタンスに感じられました。看護師として活躍した女性についての展示も数多くあり、犠牲については語られていませんでした。オペラは、日本で見るものと違うと感じました。コメディ要素のあるものを観劇したからという理由もあるかもしれませんが、空気がカジュアルだと感じました。キャンベラでは、時間が非常に少なかったけれど、戦争記念館では、日本の攻撃に関する展示を見て、そのことを日本で学習する場面があまりにも少ないことに衝撃を受けました。そうしたことから、やはり日本だけで過ごしていると、そこでの価値観の影響を大きく受け、それが常識となってしまうけれど、その常識が絶対的なものではないと気がつくことができないと感じ、自国を離れて過ごすことの意義を感じました。

2. 自身の国際交流面について（評価点・改善点）

コミュニケーションを通して感じたことは、話の仕方が異なることです。日本では、「どう思ったか」ということをあまり聞かないし、何かを話す時も、結論や自分がどう思うかよりも事例を説明して主張や結論を相手に想像させることが多いということを実感できました。博物館へ行った時も、何気ない会話の中でも、「どう思ったか」をしばしば聞かれたし、講義の中でもどう思ったかということが重視されるように感じました。しかし、自分がどう感じたかということを率直に答える機会というものは日常であまりなかったし、それよりもむしろ事例を紹介することが多かったために、事例を紹介すると、その先を待っている様子をされることが多かったです。それに特に気がついたのは、IC の授業の中で自分の経験の話をした後、他の学生が私自身の話を共有してくれる場面があり、その際に私が無意識に推測させようとしていた結論をダイレクトに言うてくれました。そこで、自分が結論を言わないで話していることや、自分の主張というものははっきり言わないことに気がつきました。

英語の使用については日常会話とアカデミックな議論との壁を実感しました。マーケットや博物館などでの一对一の会話は、不自由なく楽しむことができましたが、アカデミックな場では、論理的に説明しなくてはならず、伝わっているのか確かではない場面が多々あったように思います。日本語で話す時から、主張を明確にして論理立てて説明することの重要性を改めて理解しました。

3. その他

全体を通して、学術面も交流面も非常に意欲的に取り組めたと感じています。交流できる機会に自ら会話をしたり、疑問に感じていたことも聞くことができました。博物館や記念館、図書館などにも訪れて、オーストラリアという国に対する理解も深めることができました。今回の研修の大きな目標であった多文化共生理解についても、自分なりの答えを出すことができました。しかし、空いている時間の過ごし方が、観光になってしまうことも多く、もちろん観光から学べることも多いと思いますが、研修としてきているからには、観光ではできない経験をしたかったので、事前にどのようなことを学べるのか、経験できるのか、どこに行くべきなのかといったことを調べておくべきであったし、多文化共生理解についても、事前にもっと論文を読んだりデータを集めたりして知識を蓄えてから実際に見た方が、もっと違う視点から捉えられたのではないかと感じています。

1. 自身の学問的な学び（評価点・改善点）

短期研修を通じて、学問的に多くの学びを得ることができました。特に、ネイティブスピーカーリズムの問題点については、授業やディスカッションを通じて理解を深めることができました。ネイティブスピーカーリズムとは、特定の言語を母語とする話者が優遇され、それ以外の話者が不利な立場に置かれる現象ですが、授業では、その影響がどのように社会や個人の経験に現れるのかについて具体的に考える機会がありました。例えば、オーストラリアでは学校や職場で使用する言語と家庭で話される言語が異なるケースが多く、二言語話者としての経験が当たり前のように語られていました。この点は、日本の言語環境とは大きく異なり、言語とアイデンティティの関係について新たな視点を得ることができました。特に、言語の選択が社会的なアイデンティティの形成に与える影響や、話者がどの言語で自身を表現するかによって、周囲の対応が変わることについての議論は興味深いものでした。

また、自身が調べた村の国際結婚についての研究は、プレゼンテーションの準備を通じて初めて深く学んだ分野でした。国際結婚が増加する中で、文化的な違いや言語の壁がどのように家族関係に影響を与えるのかを調べることで、日本における関連する問題について考えるきっかけになりました。日本では、国際結婚に対する理解が進んでいる一方で、制度面や社会的な受け入れにおいて課題が残されていることを再認識しました。またこの場合の農村に嫁いだ花嫁は外国人であり、さらに農村などにおいては立場が弱いとされている女性という二重のマイノリティに在るということからも、単に外国人としての問題、女性としての問題だけではない独自の課題についても考える機会となりました。さらに、他のグループの発表を通じて、ジェンダーや多様性に関する課題が私たちの身近な社会にも多く存在していることを実感しました。

特に、Lecture Gender で学んだオーストラリアにおける女性の社会進出に関する取り組みは興味深いものでした。例えば、女性研究職の採用を一人ではなく複数人同時に行うことで、応募者の数が増加し、結果として女性の採用率が向上したという事例を学びました。この事例から、マイノリティの社会進出を促進するには、単に「枠を設ける」だけではなく、環境や制度に工夫を加えることが重要であることを学びました。同様に、話し合いの場にマイノリティが参加する際にも、ただ席を設けるだけではなく、積極的に意見を述べやすい雰囲気や支援の仕組みを整えることが必要であると感じました。このように、多様な背景を持つ人々が平等に発言し、活躍できる社会を作るためには、環境を整えることが鍵となるのだと学びました。

授業やプレゼンテーションで扱った問題には、一概に「正解」や単純な解決策があるわけではないということも実感しました。例えば、ジェンダーの平等を推進するための具体

的な政策や、言語的・文化的多様性を受け入れるための社会のあり方について講義やスピーチを聞くなかで、異なる立場の人々が持つ価値観の違いや、地域ごとの歴史的背景が関係していることに気づきました。しかし、そのような複雑な問題に対して、完全な解決策がないからといって諦めるのではなく、異なる立場の人々と協力しながら、対話を通じて少しずつ解決策を模索していくことが重要であると考えようになりました。多様な視点を持つ人々が積極的に参加し、互いの意見を尊重しながら建設的な議論を進めることこそが、より良い社会を築くための第一歩であると感じました。

この研修を通じて得た学びは、単なる知識の習得にとどまらず、自分自身の考え方や価値観にも大きな影響を与えました。異文化理解の重要性や、社会の多様性を尊重する姿勢を持つことの大切さを再確認するとともに、今後も積極的に多様な視点を学び続けることの意義を強く感じました。この経験を活かし、今後の学びや社会での活動において、より広い視野を持ちながら物事を考えていきたいと思っています。

2. 自身の国際交流面について（評価点・改善点）

UTS の学生との交流や、海外での生活を通じて、多くの学びや気づきを得ることができました。オーストラリアでは、日本文化の要素であるアニメや寿司が非常に親しまれており、私自身が普段接することのなかった種類のアニメを逆に紹介してもらう機会もありました。また、J-POP が広く支持されている現状にも触れ、文化的な影響の広がりについて改めて実感しました。シドニーの街中では、プリクラなど日本特有のポップカルチャーも目にすることができ、異国の地での日本文化の浸透ぶりに驚かされました。

シドニーを歩くと、さまざまな人種や背景を持つ人々が日常的に共存している光景が広がっており、日本ではあまり見かけない多文化共生の現実を肌で感じることができました。これから日本においても、外国人労働者の受け入れが進む中で、多様な文化背景を持つ人々が共生する社会への変化が避けられないと感じました。しかしながら、現状の日本ではこのような多様な文化が交じり合う光景はまだ限られているため、具体的な共生の方法や環境づくりについて想像するのが難しいという課題も浮かび上がりました。

UTS では、異なるルーツや文化を持つ学生たちが、積極的に意見を交換し、互いの背景や価値観について深く語り合う姿が印象的でした。各々が自分のルーツや体験を共有する中で、相手に対する理解や尊重の気持ちが自然と育まれていく様子に、国際的な学びの場ならではの温かさと可能性を感じました。こうした交流を通じて、単に言語や知識を学ぶだけでなく、人間としての多様性や互いの違いを受け入れる大切さを再認識する機会となりました。

また、オーストラリアでは電子辞書があまり一般的でないという事実と直面し、私が日常的に使っているツールが必ずしも世界共通ではないことを痛感しました。こうした経験は、普段何気なく使っているものやサービスについて、改めてその背景や文化的な違いを考えるきっかけとなり、グローバルな視点を持つ重要性を実感させてくれました。

英語でのコミュニケーションにおいては、最初は緊張や戸惑いがありましたが、UTS の学生をはじめ、関わってくださった多くの人々が温かく支援して下さったことが大きな助けとなりました。彼らは、私が言葉を探している間も辛抱強く待ってくれ、難解な単語や表現についても具体的な例を挙げながら丁寧に説明してくれたため、徐々に自信を持って話せるようになりました。また、自分自身も難しい文法や単語に固執するのではなく、シンプルで実用的な表現を積極的に活用することで、コミュニケーションがより円滑に進むことを体験し、研修の後半には臆することなく自分の意見を述べられるようになったと感じています。

このような体験を通じて、異文化交流の大切さだけでなく、個々の文化や背景に根ざした考え方が、グローバルなコミュニケーションにおいてどれほど貴重であるかを深く理解することができました。UTS での学びは、今後の私自身の成長において、国際的な視野を広げるための貴重な糧となったと確信しています。

1. 自身の学問的な学び（評価点・改善点）

私がこの研修を通して興味を持っていたことの1つとして、学問におけるジェンダー平等がある。私自身が現在、工学部で学んでいるということもあり、特に理系分野において、女子の割合が少ないという現代日本が抱える課題について、興味があった。この研修を通して、シドニーではどのような状況なのだろうかと興味を持っていた。プレゼンテーションの準備を通して、日本の学問におけるジェンダーに関する現状について、改めて調べることができたことも良かった。「Lecture -Gender-」を通して、現在日本のいくつかの大学で行われている、工学部での「女性枠」の設置について意見を聞いたこともとても有意義な学びができた。また、UTSでも工学部を中心に女性の割合が少ない現状があることや、それに対する取り組みについても教えていただくことができて、とても貴重だった。それらを踏まえて、今の日本の現状に対して、大学目線、行政目線、そして、自分たち学生目線の、それぞれの目線からどのような取り組みを行うことが効果的なのか、考えを深めていきたいと思っている。また、オーストラリアでは男性の方が大学進学率が低いということを知ることができ、私にとって新しい発見だった。その背景にある課題についても、さらに調べてみたいと思っている。

キャンベラでのフィールドトリップについて、特に印象に残っているのは、オーストラリア戦争記念館を訪れたことである。私は中高生の時に長崎に住んでおり、長崎と広島平和記念館には行ったことがあったが、他の国のものにはこれまで行ったことがなかった。視点が違うと、戦争はどのように捉えられているのだろうか、どのように語り継がれているのだろうかということに、とても興味を持っていた。訪問時間が限られていたため、第2次世界大戦に関する展示を中心に見学した。展示の後半では、広島・長崎に原爆が落とされたというニュースが大きく展示されており、オーストラリアでもちゃんと記録され伝え残されているということが分かった。一方、日本と異なっていたのは、イギリス領だったオーストラリアでは、イギリスが参加する多くの戦争に参加しているため、戦地から戻ってきた方々の新しいサインや、帰らぬ人となった方を弔う場所もあったということである。戦争が過去のものではなく今もなお続いているものと改めて実感された。またキャンベラを訪問する機会があったら、他の戦争についての展示も見学してみたいと思うとともに、他の国の戦争についての資料館に足を運んでみたり、平和教育がどのように行われているのか調べてみたいと思った。また、UTSでの授業で、学生からオーストラリアではアンザッククッキーが有名だと教えてもらった。戦争中、妻が作って戦地へ行く男性に持たせる習慣があったということを教えてもらった。この話を聞いて、日本では戦争中、千人針として、多くの女性が一針ずつ縫って作ったお守りを贈っていたということ思い出した。国同士が戦う戦争においても、家族を思う気持ちは世界共通で変わら

ないということを感じた。

2. 自身の国際交流面について（評価点・改善点）

今回の研修を通して、私が心に留めて意識しておきたいと思っていたことの1つが「積極性」である。研修の中で、JASSの学生との交流には積極的に参加するようにしていた。ダーリングハーバーやオーストラリア博物館、パディースマーケットなど、さまざまな場所に案内してもらった。目的地に向かっている途中も、積極的にJASSの学生と話す「積極性」を意識するようにしていた。ダーリングスクエアを訪れた際、お茶大の国際交流プラザをデザインした隈研吾が同じくデザインした建物があり、デザイン自体にも共通性があった。お茶大との共通点を話題にできたことが印象に残っている。また、シドニータワー・アイ展望台について話している時、外から見たらわからないけれどタワーは実は回っていると聞き取れたけれど、1周にどれくらい時間がかかるか私が質問すると、「Forever」と答えられて、このトピックがジョークなのか本当なのかわからないという場面があった。実際調べてみると、タワーが回っているという話は本当で、「Forever」がジョークだったと分かり、英語でのコミュニケーションの経験を積むことが必要だと改めて感じた。

英語使用について、はじめは買い物をしていて人にぶつかりそうになった時、反射的に「すみません」と日本語で言ってしまうくらい日本語での生活が抜けていなかったが、日経つにつれて英語でのコミュニケーションにも少しずつ慣れてきて、自然に「Excuse me.」が出るようになったことは良かった。私は特にスピーキングに苦手意識がある。研修前に自分の語学力を測る目的でTOEICのspeaking&Writingを受験した。ライティングは高得点が取れたが、スピーキングに課題が残るという結果で、研修を通して自分のスピーキングの力を少しでも向上できるように頑張りたいと改めて実感した。実際にネイティブの英語に触れてみて、ネイティブの発音やスピード感に慣れず、特に授業で内容を聞き取るのが難しかった。授業は録音して、授業後に繰り返し聞くことで、理解を深めるようにしていた。それとともに、自分の英語での発音や文をチェックし少しでも修正できるように心掛け、日々の学習に取り組むことができた。また、予習は念入りにするようにしていて、授業で使用する資料を読み込むだけでなく、そのトピックについて、自分の意見や考えをあらかじめ考えて、英語で文章を書いて自分の考えを明確にしておいた。スピーキングは苦手だがライティングは得意という自分の英語力の特徴を活かし、少しでも授業を有意義なものにできるように、努力できたと思う。しかし、ディスカッションの形の授業になると、その場での議論の展開を理解して発言をすることが求められるので難しく感じ、改善の余地が特に大きくあると実感した。帰国後約1週間後、TOEICのReading&Listeningを受験した。特に感じるのは、英語での情報収集能力が伸びたのではないかとということである。短期間ではあったが、英語に囲まれた環境で生活するのは初めてだったので、耳と目で英語の情報を受け取り、整理する感覚を鍛えることができたのではないかとと思う。これからも英語学習を継続して取り組むことを意識したいと思う。

私は自由時間にクイーン・ヴィクトリア・ビルディングを訪れた。世界一美しいショッピングセンターとも言われるこの建物の中に、ストリートピアノが設置されていると聞いていたので、留学前からずっと行ってみたいと思っていた場所だった。建物に入ると、美しいステンドグラスや階段、オーストラリアの歴史を表現してある時計などに圧倒された。ピアノは、長方形の建物の中央付近に置かれていた。私は2週間前のコンサートで演奏したラヴェルの「水の戯れ」という楽曲を演奏した。ピアノはとてもアンティークな音色で、ロマネスク様式の建物のデザインも相まってとても趣があった。演奏しているうちに、ピアノの周囲に訪れている人が集まってきて演奏に耳を傾けてくださっていた。弾き終わった時多くの方が拍手をしてくださり、とても嬉しかった。クラシック音楽の良さは、歌詞がなく言語の障壁がないということだと思う。今回まさに、言語や文化の壁を超えて音楽の良さをひとと共有できたという感覚があり、感動した。私は現代の多文化社会を生きていく上で何か大切なことを学ぶことができたように感じた。世界には数多くの言語があり文化があり、みんながすべての言語を使ってお互いを分かり合おうというのは難しいし、だからといって世界中の人が1つの言語だけを使えばよいという考えにも私は賛成できない。言語を介さなくても、人は何か感動を分かち合えるし、つながりを実感できるのだと気づかされた。多文化の人々と共生できる社会を作っていく上で、この感覚は大切にしたいと思った。また、演奏した後に、2人の方が声をかけてくださって、演奏についてコメントをくださった。とてもきれいな演奏だったとお褒めの言葉をいただいたり、若い時にラヴェルの曲を弾いたことがあるけれどももう覚えていないとお話してくださったり、音楽の話題に関して、英語でコミュニケーションを取れたことが嬉しかった。音楽の演奏を通して分かち合えたものを、言語を通してさらに分かち合うことができたことにとっても感動した。それと同時に、自分の語学力がもっとあればさらに話を広げられたのという悔しさもあり、これからの英語学習のモチベーションにしたいと思う。

また、私は現在、アルバイトとして個別学習塾で主に小・中学生に国語や英語を中心に教えている。その中で、海外で幼少期を過ごし日本語があまり上手には使えないという小学生に、受験に向けた国語を教えた経験がある。中国をバックグラウンドに持つ小学生と、オーストラリアに住んでいた経験がある小学生に教えた経験があるのだが、言語の構成の違いからか、2人の生徒にとっての日本語の難しさは若干異なっていたように思う。授業をする上で、それぞれにとって分かりやすくやさしい日本語で教えることを意識していた。今回の研修では日本語の授業に複数回参加したが、UTSの学生と日本語で話す際は、話す言葉の選び方や順番、速度感や間の取り方、身振り手振りなど、これまでの学習塾での自分の経験を活かし、自分なりに工夫してコミュニケーションをとることを意識して交流することができたのではないかと考えている。また、研修で受講した「Lecture - Gender-」の授業において、講師の方の英語が特に伝わりやすくわかりやすく感じたことが印象に残っている。単語の選び方やスピード感、具体例を含めた説明などがよく工夫されているように感じた。私自身、このおかげで授業内容の解像度を高くすることができ、学

びが深まったと思う。授業後に、伝わりやすい英語を研究・発信されている方だと知り、具体的にどのような工夫・意識をされているのか、興味を持った。それと同時に、日本語が母国語でない人にとって分かりやすく伝わりやすい日本語の話し方をするには、どのような工夫や意識が必要なのか学んでみたいと思った。私が学習塾で教えた際は、自分の感覚で伝わりやすいと判断したことしか実践できなかったのも、学問として「日本語教育」を学ぶことで、日本に住む日本語を頑張りたい子どもたちをサポートできるようになりたいと感じた。

1. 自身の学問的な学び（評価点・改善点）

EDIについて学びを深めることができたことが評価する点であると考え。オーストラリアでは、スーパー、飲食店、公共施設などあらゆる場所にレインボーフラグが掲げてあった。各建物にはジェンダーレストイレがあり、標識も男女ごとには色分けわされず黒一色だった。最も驚いたことは、シドニー大学に行った際、レインボーフラグが屋根上の目立つところに掲げてあったことだ。国立の大学で堂々と掲げていることに衝撃を受けた。国をあげて性の尊重に向き合う、その強い姿勢を実感することができた。また、UTSの講義を受けた時に、女性の登用方法の工夫や収入について学ぶ場面があった。女性を登用する際は、育児や介護など女性の生活背景を考慮した上で、その女性が積み上げたキャリアの成果を認めること、収入については、女性の権利を主張するためにストライキを起こすことなど、時には柔軟な対応が取られ、時には女性が力強く行動を起こして変化に繋げていく実態があるということを学ぶことができた。

また、授業でUTS学生と議論・発言できたことが評価できる点であると考え。コミュニケーションの授業で「英語」について話をしたとき、UTSの学生は訛りがない「正しい発音をすること」がコミュニケーションでは重要だと話していた。しかし、私が(英語は日本語と異なる文法であること、受験勉強で重視される傾向にあることから)日本人は「正しい文法」の方が重要で意識すると意見したところ、関心を持って聞いてくれた。さらに、いくつか質問を投げかけてくれた。この話をするまで、ジャパニッシュという言葉があるように、多様な発音が認められているため「正しい発音」はコミュニケーションにおいて重要事項ではないと考えていた。一方、現地の方は話して伝えることが重要で「正しい文法」で会話をするには重点をおいていなかったため、驚かれた。自分の国では当たり前だと思っていたことも、共有してみると互いに気がつくことがある。勇気を持って語り合うことの重要性を学ぶことができた。

学問的な学びで改善が必要だと感じたことは、知識を持って授業に挑むことである。あらかじめ、どのような内容で授業が展開されるかは分かっていた。日本にどのような問題があるのか、ということに現地の学生は興味を持っており質問を投げかけられた。しかし、日本の歴史や現状を知らないがために上手く答えられない場面があった。海外の人と話すときは特に、自身の国について語れる知識を持っておくと、より密度の濃い議論をすることができたと感じた。

2. 自身の国際交流面について（評価点・改善点）

今回の短期研修は、あえて知り合いの居ない環境で参加することを選択した。「誰かと何かを一緒にする」ではなく「自分の意志で積極的に行動する」ことに挑戦したかったから

だ。交流の面において、それは達成できたと考える。日本人どうしで固まらず、自ら現地の学生に話しかけに行くよう常に心がけたからだ。大学生活のことやシドニーでおすすめの場所、日本のこと、専攻分野である教育や関心のあるジェンダーのことなど、様々な話題で会話をすることができた。また、UTS 学生と連絡先を交換して日程調整を行い、授業後にシドニー内を一緒に散策することができた。授業内での交流では、シドニーで発見した両国間の違いを共有したり、シドニーのジェンダー観について質問してみたりと積極的に会話に参加することができた。一方で、議論が中心の授業では、UTS 学生の活発なやりとりについていけず、自分の意見は持っているのに伝えられない場面があった。拙い英語で場の雰囲気を乱してしまったらと不安になったからだ。UTS の学生は、話し始めれば耳を傾けてくれる人ばかりだった。遠慮せずに堂々と話す勇気を持って参加できれば、さらに自分自身を成長させることができたと考える。英語力だけでなく、気持ちも鍛えていく必要があると心底感じた。

3. その他

研修では、お茶大の学生代表として全員のホテル帰宅を確認したり、日程調整を行ってお茶大生と UTS 学生が授業後に交流することができたりするよう努めた。また、大学の授業でお茶大紹介をすることになったため、代表で挑戦することを決意した。大学の魅力が視覚的に伝わるよう、メンバーから写真協力を仰ぎスライド作りを行った。説明のために英語と簡単な日本語のスクリプト作りも行った。私は、英語で説明する役を引き受けた。原稿はなるべく暗記をして、スライドの写真を指しながら説明するなど理解してもらいやすいように工夫して紹介することができた。さらに、女子大と女子教育についての発表では、1 人でプレゼンをすることになった。ペアが作った原稿、自分が作った原稿の両方を覚え、学生の目を見ながら訴えるように話すことを意識した。緊張してカンペを見てしまうこともあったが、落ち着いてゆっくり話すことができた。

研修に参加するまでは、近くにいる人に頼ってしまうことばかりだった。しかし、この研修で学生代表を務めたり、積極的に英語で話しかけたりしたことで、自身がいくらか外交的になっていることを実感した。また、海外という地や人からたくさんの刺激を受けた。これから日本の生活に戻るが、今後 UTS からお茶大に来る予定の学生とシドニーで交流することもできた。大学の中でも留学生と関わる機会はあるため、積極的に交流して英語力の向上とともに自分自身を精神的・社会的に成長させていきたい。

1. 自身の学問的な学び（評価点・改善点）

授業では、言語の多様性や、オーストラリアのスポーツとアカデミックの場でジェンダー格差をどう乗り越えてきたかといった内容について学びました。他にも日本語の授業に参加して現地の学生と話したり、自身のプレゼンテーションの発表後にディスカッションを行ったりしました。ディスカッションでは積極的に意見を述べる学生が多く、どんどん話が進んでいくため、事前に自分の意見を英語である程度述べられるよう準備してから授業に臨めばよかったなと思います。

最終日のキャンペラフィールドトリップでは、戦争記念館と国会博物館を訪れました。オーストラリアの視点から第二次世界大戦を知ったり、民主主義の確立、男女平等、個人のジェンダーの尊重について多くの資料を見ながら学んだりしました。オーストラリアでどのような運動が行われて現在の多文化社会に至ったのかを理解することにつながり、非常に興味深かったです。

2. 自身の国際交流面について（評価点・改善点）

授業ではディスカッションやグループワークを通して学生と交流できました。英語で意見を交換し合うのは難しかったですが、拙い英語でも相手は理解しようとしてくれるので、とにかく恐れず言葉を発することが大切だと気付きました。日本語の授業では、互いの学校生活や趣味について英語と日本語を交互に使いながら話せたので、他の授業よりもラフに学生と関わられて良かったです。現地のおすすめのお店や食べ物について教えてもらうこともできました。

UTS には JASS という日本文化サークルがあり、そこに所属している学生たちが複数日にわたってキャンパスやシドニーの紹介をしてくれました。サンリオの話で盛り上がった学生バイト事情について聞いたりして、深く関われた機会でした。

現地の学生はこちらが積極的に話しかければその分だけ応答してくれますし、SNS も気軽に交換してくれるので、今後同じような機会があったら毎日ランチに誘い、放課後を一緒に楽しんで友達を作れたらいいなと思います。

3. その他

シドニーにはオペラハウスや動物園、港、ビーチなど多くの観光地があるため、授業の前後に観光を楽しめて良かったです。

想像以上に多文化な社会で、アジア系の人やアジア料理店も多く、自分が外国人だと感じさせない環境でした。学食や街中にはお寿司屋さんがあり、日本のキャラクターのグッズを身に付けている人も多かったです。

一方で建造物は西洋風のデザインが多く、かつてイギリスの植民地だった歴史を感じました。

1. 自身の学問的な学び（評価点・改善点）

私は、来年度からお茶大で多文化交流や多文化共生、日本語教育を専門に学ぶ予定なので、今回のシドニー研修は授業内容、シドニーという土地ともに非常に学び多いものであり、来年度以降の自分の学びにつながる研修になった。UTS での最初の授業「異文化間コミュニケーション」は全て英語での授業で、バックグラウンドがそれぞれ全く異なる学生が授業に参加していた。授業内では、UTS の学生含め 7、8 人で先生から提示された話題に沿ってディスカッションをした。カジュアルな雰囲気ディスカッションが進み、30 人ほどの学生の前でも、自分の意見や経験を自信を持って述べている学生が多い点が印象に残った。複数言語の切り替えを都合よく行う“code switching”や複数言語を柔軟に使いながら学びを深める“translanguaging”の身近な例を多言語話者である UTS の学生から聞くことができたので、来年度、お茶大で履修する第二言語教授法や日本語教育法、異文化間のコミュニケーションの授業への理解度がグッと上がった。UTS の学生の授業へ積極的に参加する姿勢にとっても刺激を受け、初回の授業以降臆せず自分の意見を英語で発言することができ、自分自身非常に成長したと思う。次に、有名な女子サッカー選手のジェンダー講演会と女性研究者の働き方についてのジェンダー講義を受けた。講演会では、英語を聞きとるのに大変苦労したが、スポーツ界において賃金格差をはじめとした性差別が起きている、その問題に取り組んでいることを知ることができた。講義では、UTS の EDI 事務局の方に来ていただき、男性社会である大学内でのジェンダー格差やその取り組みを教えていただき、積極的に質問をすることで、UTS だけでなくオーストラリアでの先進的なジェンダー格差への取り組みを詳細に知ることができた。例えば、女性の大学研究者の昇給は、昇給に必要な書類作成に時間がかかることや、結婚や出産によるキャリアの中断によって、なかなか昇給できない状況に置かれている。そこで、UTS の EDI 事務局は昇給システムを変えたり、トップに立っている女性研究者が上層部に働きかけたりすることで、学内の女性研究者の働きやすさを向上させている。私は、性別による待遇の差を感じたことは今まで一度もなかった。しかし、男性社会とされている場所では現在もジェンダー格差があることを知ることができたとし、差別を受けてきた人のリアルな声を聞いて、女性の権利についてこれから真剣に考えていこうと思うことができた。最後に「現代日本」の授業で、私は UTS の学生に現代日本の多文化共生について発表した。発表準備をしている中で、日本の多文化共生の現状について自分自身知らないことがたくさんあることを痛感したし、UTS の学生から質問を受けた時に英語でうまく答えられないもどかしさを感じた。また、日本とシドニーの多文化共生のための取り組みの違いについて UTS の学生に質問をした際、自国の取り組みに対する認知度の高さに驚いた。私は、日本の多文化共生の取り組みの一つとして「やさしい日本語」について発表したことを踏まえて、多言語が共存す

るオーストラリアにおいて「やさしい英語」のようなものは存在するのか UTS の学生に質問をした。Easy English とは Formal English であり、やさしい日本語とは少し異なるものであることがわかり、非常に興味深く思った。オーストラリアと日本の多文化共生の違いを知ることができたと同時に、社会問題や日本社会の問題に対する自身の意識の低さを思い知ることができ、非常に学び多い授業だった。最終日のキャンベラでの戦争記念館、旧国会議事堂での訪問では、ジェンダー、政治への参画、オーストラリアと日本の歴史、EDI 等の展示物を注意深く拝見した。オーストラリア側から語られる第二次世界大戦の展示を見て、様々な視点から歴史を学ぶことの大切さを知ることができ、これから違う国や都市に訪れた際にも必ずこういった記念館や展示を見に行こうと誓った。今回のシドニー研修では、UTS での授業、キャンベラ訪問を通じて、多くの学びを得ることができたと同時に、自分の学びの姿勢の未熟さや知識の無さに気づくことができた。これからのお茶大での学習に活かしていきたいと思う。

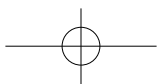
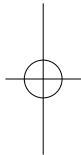
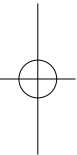
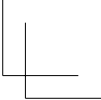
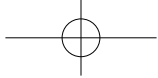
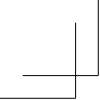
2. 自身の国際交流面について（評価点・改善点）

私は来年度の後期から長期留学に行く予定なので、英語のみでの生活環境に慣れることを目標に今回の研修に臨んだ。日本にいと長時間英語のみで会話をする機会がなかなかなかったので今回の研修は英語学習を深める非常に良い機会になった。今後の英語学習に活かせる気づきを二つ得ることができた。一つ目はリスニング力の大切さだ。普段からお茶大に来た留学生と一対一で英語を話す機会はあるけれど、日本語を話せない UTS の学生と大人数でディスカッションをしたことは一度もなかった。UTS での最初の授業「異文化間コミュニケーション」の授業では、7、8人でディスカッションをする時間があつた。この授業では、聞き取れないところがあつても会話の流れを止められず、何を話しているか分からないままディスカッションが進んでしまい、自分の意見を伝えることができなかった。英語での授業についていくためには、まずリスニング力を鍛える必要があることに気づくことができた。長期留学までの期間は、リスニングを中心に英語学習を進めていきたいと思う。二つ目は、英語に長時間触れることの大切さだ。授業や講演会で1時間以上英語を聞いたり、街中の標識や注意書きを読んだりすることに最初は慣れず、疲労感を感じた。シドニーで10日間生活しただけでも、英語であふれた生活に対する疲労感は徐々になくなっていったので、帰国後も日常的に英語に触れていくことを大切にしたい。また、UTS の学生と積極的にコミュニケーションを図ったことで多くの学びを得ることができた。オーストラリアでの大学生活、趣味など、授業中や授業終わりにたくさん質問をし、オーストラリアのいろんな側面を知ることができた。特に、日本語初級クラスと一緒にディスカッションをした学生さんたちは、日本の学生生活や文化に強い興味を示してくれ、積極的にコミュニケーションを取ってくれたので、非常に楽しい時間を過ごすことができた。相手の文化に興味を持つことの大切さに、その UTS の学生との会話を通じて気づくことができたし、自分のコミュニケーション能力の未熟さを痛感し、会話力を磨いてい

きたいと思った。

3. その他

このシドニー研修では、主体性を持って行動することができたと思う。私は昨年11月に外務省の国際交流事業で中国を訪問した。中国の学生と国際交流をしたり、企業に訪問したり、観光地を巡り、中国の魅力を発見することができた良い研修だったが、各地の大学から集まった日本人学生でグループになって行動する際に全く意見を出せず、主体的に行動できなかったことが大きな課題として残った。この研修に参加する前、今回の研修では積極的に自分の考えを出すことを目標に定めた。今回のシドニー研修では、自由時間が多くあったため、グループでシドニーを観光する時間があった。その際、率先して計画を立てたり、目的地までの道順を調べたりした。また、ネットでチケットを取り、オペラハウスまでオペラを観に行ったり、個人的に行きたかったカフェに最終日の朝に一人でバスに乗って出かけたりした。今回の研修では以前の反省を活かし、他人任せにせず、主体的に行動することができたと思う。



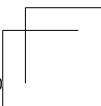
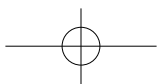
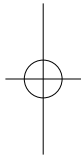
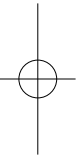
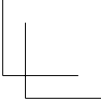
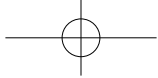
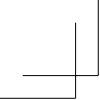
2. シドニー工科大学における発表資料

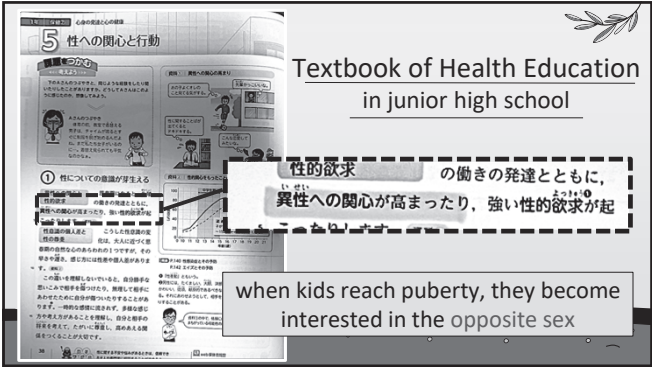
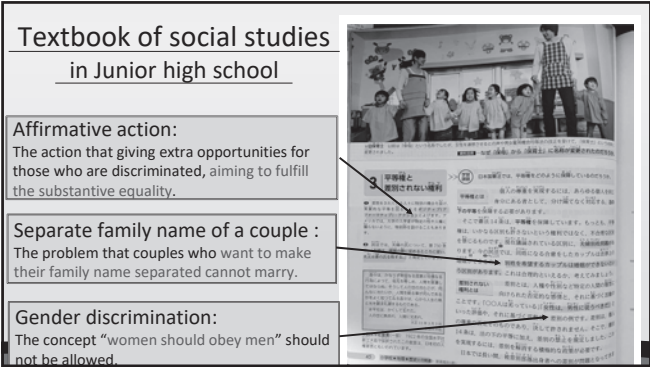
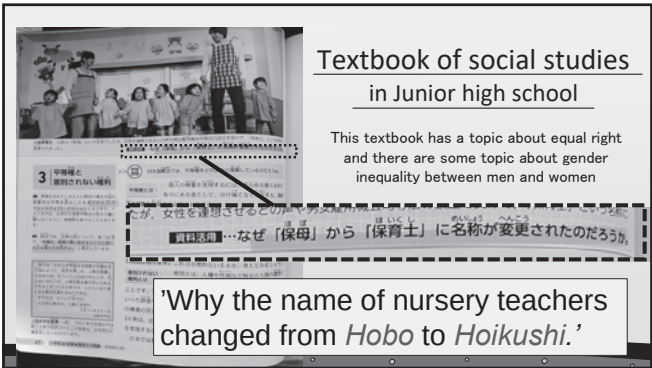
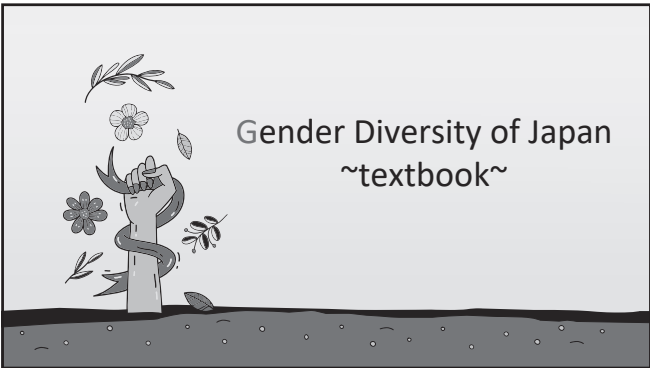
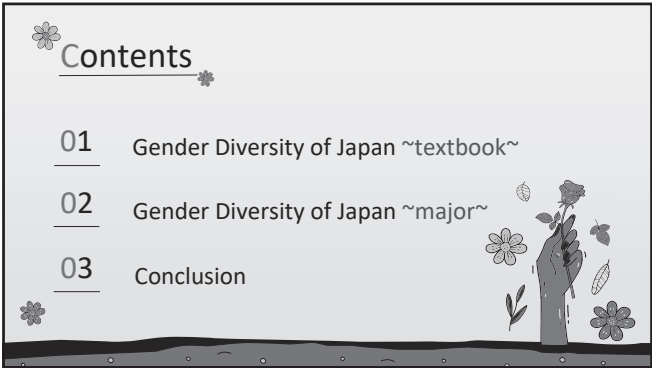
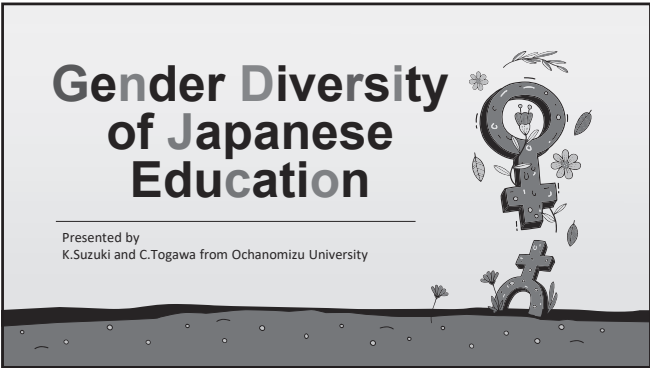
“Gender Diversity of Japanese Education”- Suzuki and Togawa

“Multicultural Coexistence in contemporary Japan”- Yamai and Ariki

“Women’s University and Education of Women”- Hiyama and Nomoto

“Cross-Cultural Marriage and Integration: Building a Harmonious Society”- Fuke
and Tanaka





Project of gender diversity in education

しょう太くんとあやちゃん
どうしたら いいかな？

Shota and Aya What to do?



Project of Ochanomizu
University;
working on the topic of
gender diversity

Project of gender diversity in education

Shota(Boy):
It's strange that girls like toys of car. And the colour is blue! Blue is colour of boys. Car engineering is a job of men.

Aya (Girl):
It isn't strange! It's normal for girls to like cars. And you shouldn't say 'because you are a girl' I want to be a car engineer in the future.



Gender Diversity of Japan ~major~



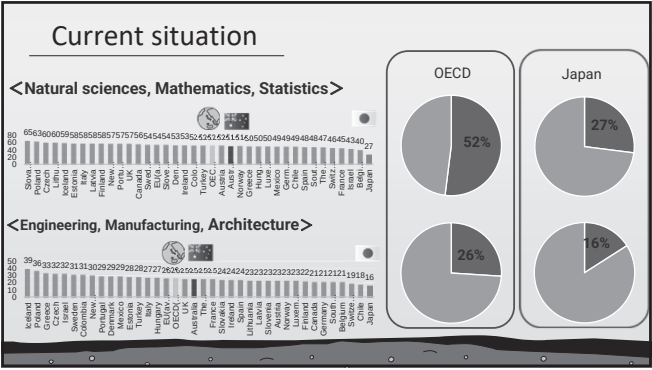
Academic Study in Japan

Science

- Natural sciences
- Mathematics
- Statistics
- Engineering
- Manufacturing
- Architecture
- etc.

Humanities

- Literature
- Communication
- Law
- Culture
- Business
- Psychology
- etc.



Why women tend to avoid Science?

Stereotype



There is a stereotype that science is something that mainly men major in.

Childhood experiences



Girls tend to have fewer scientific experiences such as visiting science museums.

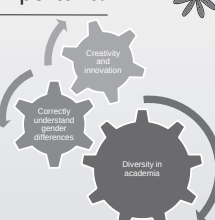
Few role models



There are few role models, it is difficult to imagine future career.

Why is gender equality in academia important?

Gendered innovations



Conclusion

- 01 Gender Diversity of Japan ~textbook~
- 02 Gender Diversity of Japan ~major~



Reference

- https://www.awesome-stemwomen.org/?%E3%81%AA%E3%81%9C%E7%90%86%E5%87%A5%E7%B3%BB%E3%81%A8%E5%A5%B3%E5%AD%A7%E3%81%8C%E5%B0%91%E3%81%AA%E3%81%84%E3%81%AE%E3%81%8B/7utm_source=chatgpt.com
- https://www.oecd.org/en/publications/education-at-a-glance-2021_b35a14e5-en.html
- 2021/3 内閣男女共同参画局男女共同参画社会連携会議 / お茶の水女子大学 サイエンス & エデュケーションセンター「しょう太くんとあやちゃん どうしたらいいかな？」
- 大修館書店出版 「保健体育」
- 帝国書院 「公民」

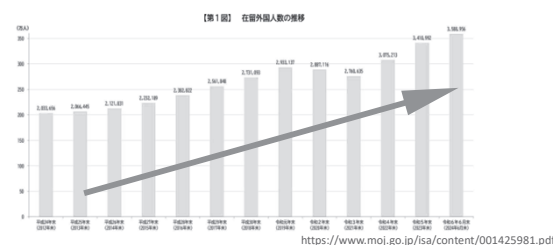


Thank you

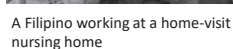
Ochanomizu University
M.Yamai
M.Ariki

- ▶ Definition of Multicultural Coexistence
- ▶ Reasons why we chose this topic
- ▶ Foreign workers in Japan
- ▶ First effort: Japanese language schools
- ▶ Second effort: Easy Japanese
- ▶ Contemporary Japan's challenges in multicultural coexistence
- ▶ Conclusion

[Graph1] Changes in the number of foreign residents



Vietnamese technical interns
working at a construction site



Year	Number of Japanese language schools (thousands)	Number of Japanese language institutes (thousands)	Number of Japanese language facilities (thousands)
2015	12.29	57.39	69,681
2016	17,262	101,881	117,881
2017	19,568	109,912	129,912
2018	41,606	158,104	199,710
2019	46,411	171,289	217,677
2020	41,755	166,921	208,676
2021	39,241	163,658	202,899
2022	44,800	178,307	223,107
2023	46,575	236,532	283,107



05 | Second effort: Easy Japanese

土足厳禁 → 靴を履いてはいけません
(dosokugenkin) (kutsu wo haitewa ikemasen)

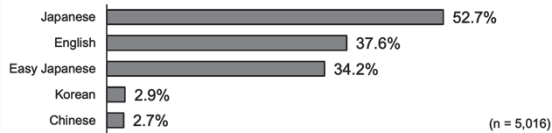
→ you must take off your shoes

- The important things to replace with Easy Japanese
1. using simple vocabulary
 2. shortening the sentence
 3. writing the pronunciation of kanji (Chinese character)



05 | Second effort: Easy Japanese

Preferable languages other than native language for information provided (Top 5 responses)



<https://www.moj.go.jp/isa/content/001415876.pdf>

06 | Contemporary Japan's challenges in multicultural coexistence

1. Labor Exploitation
2. Inequities in Civic Rights
3. Insufficient Cultural and Educational Support

07 | Conclusion

Many efforts have been made to overcome the language barrier in Japan but there are still many areas for improvements. We want to know other countries' efforts to realize multicultural coexistence.



References

- <https://www.mofa.go.jp/mofaj/ca/fna/ssw/us/>
- <https://www.moj.go.jp/isa/content/001425981.pdf>
- <https://tcj-education.com/japanese-language-education-for-foreign-employees/>
- http://www.pref.kagoshima.jp/af21/documents/98965_20240905125143-1.pdf
- <https://www.honyakuctr.com/blog/001317.html>
- <https://www.moj.go.jp/isa/content/001415876.pdf>

Thank You
for your attention!

Women’s University and Education of Women

Ochanomizu University

Y.Hiyama

M.Nomoto

The reasons we choose this topic

A History of Japanese Education

- Education for an emperor
- Certain ideas were prevalent.
- Ignoring education of women

The Current Situation in Japan

- Multicultural coexistence
- For all student including foreign students or students with disabilities
- No discrimination based on sex[gender]



2025/5/1

3

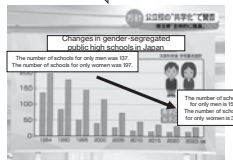
The reasons we choose this topic

Women's schools are not preferable.

Discussion about disappearing Women's [Men's] schools

Women's schools are many in Japan

Changes in gender-segregated public high schools in Japan



The number of schools for only women was 127.

The number of schools for only men is 10.

The number of schools for only women is 10.

Some women's schools in Gunma prefecture

Some women's school merged with other school.

[This is a graph which is used in a TV program.]

References: 「図説」 公立高等学校の男女別別校 - 歴史ある中・高校「男女別」の現状 - 当報告書 (2024年5月22日現在) | 日本L'NEWS NNN

高専学校・定時制高校の男女別・公立・私立 - 群馬県教育委員会

2025/5/1

3

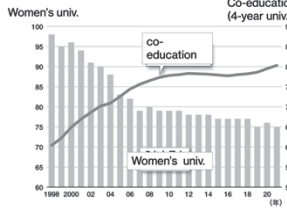
Is Women's University Good or Bad?

In 2024

Japan has 75 Women's University

2/75 national university

1. Ochanomizu University (Tokyo)
2. Nara Women's University (Nara)



Women's univ.

Co-education (4-year univ.)

co-education

Women's univ.

Women's Universities account for about 10 % of the total

5/1/2025

4

What do you think that there are women's universities in Japan?

Good

Discrimination

Inequality

Affirmative

Empowerment

Bad

5/1/2025

5

Constitution of Japan (1947~)

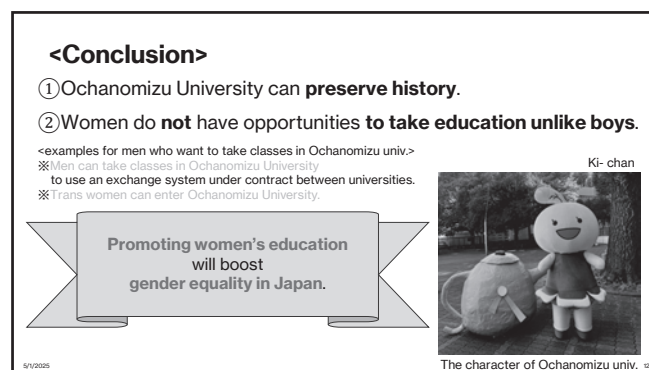
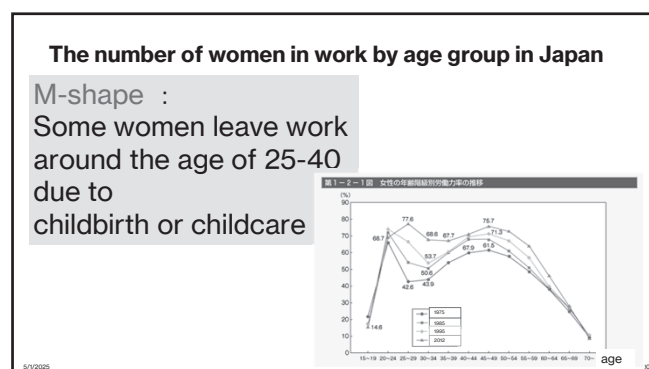
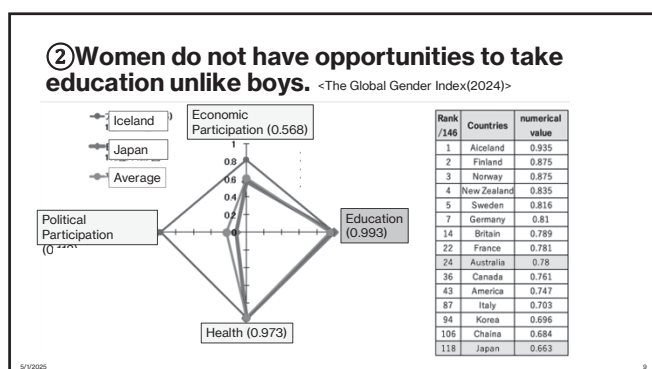
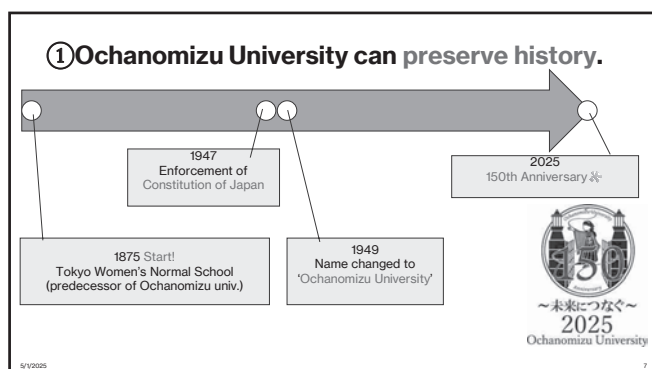
‘The right to an equal education’

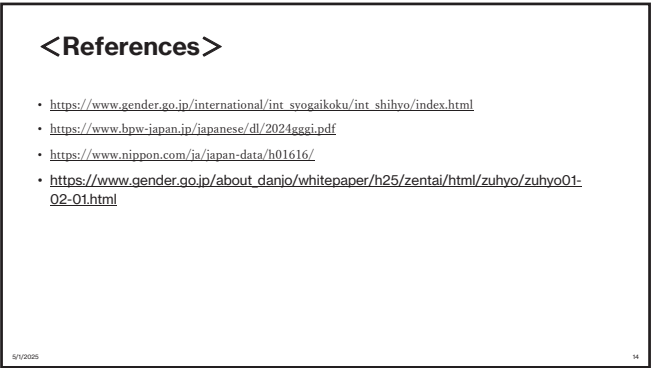
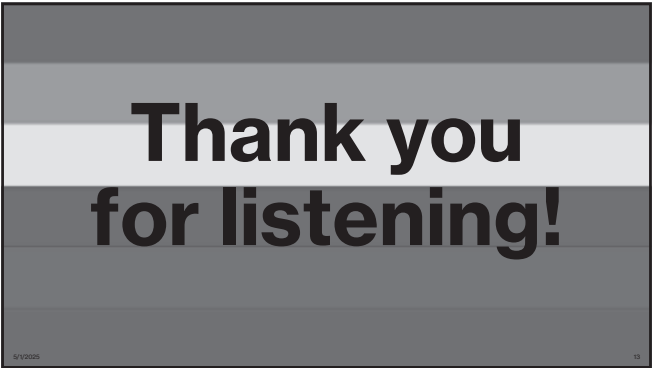


Ochanomizu Univ. = BAD !?

5/1/2025

6







Cross-Cultural Marriage and Integration : Building a Harmonious Society

K.Fuke
M.Tanaka



Outline

- Foreign residents in Japan
- Village International Marriages
- Efforts towards multicultural coexistence



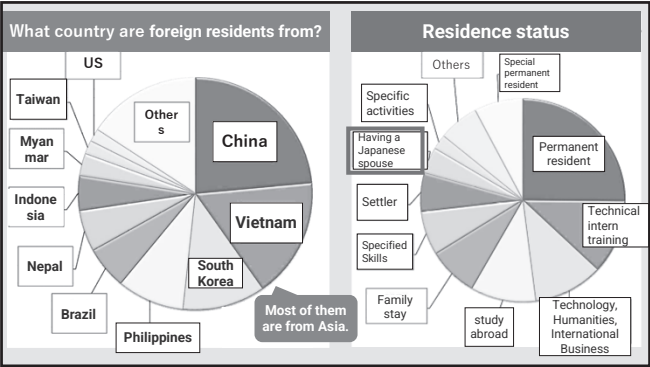
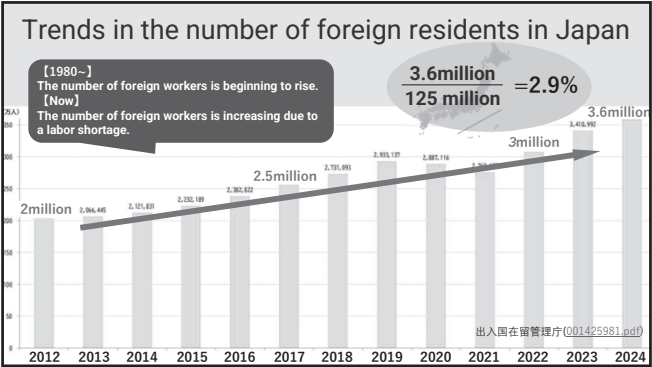
Why we chose this theme

- Foreign residents in Japan
- Village International Marriages = immigrant women
- Efforts towards multicultural coexistence

two handicapping factors
①immigrant ②women

Unless society becomes easier for them to live in, multicultural coexistence will not be achieved.

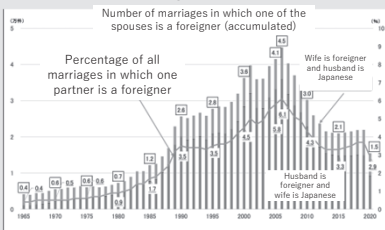
Foreign residents in Japan



Village International Marriages

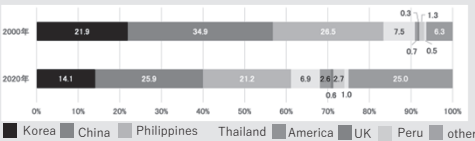
International Marriage in Japan

Trends in International Marriage



- Since the 1980s, the number of marriages where the husband is Japanese and the wife is a foreign national has been increasing.
- About two-thirds involve a Japanese husband and a foreign wife.

Wife's Nationality



About 70% of foreign spouses come from Asian countries. One reason for this trend is the phenomenon known as "Mura no Kokusai Kekkon" (village international marriages).

"Mura no Kokusai Kekkon" (Village International Marriages)

The term "foreign brides" refers to women who marry into farmers. Since the period of rapid economic growth, rural areas have seen a decline in agriculture and an aging population.

To address these challenges, foreign brides have been welcomed into farming and mountain villages, particularly in regions such as Tohoku and Niigata.

Challenges

- **Language Barriers:** Many brides struggle to communicate and access Japanese classes.
- **Adapting to Rural Life:** Rural areas have fewer foreigners and closed communities.
- **Family Expectations:** Husbands and in-laws expect traditional roles, causing isolation.
- **Economic Issues:** Jobs are scarce, leading to financial dependence.
- **Discrimination:** Media stereotypes create biases. Support is often limited.

Efforts towards multicultural coexistence

2006~
Japanese government formulated
「Multicultural coexistence
promotion plan in the region」.



Japanese
Language
class



Multilingual
consultation



Ethnic Town



- ・日本人はまだまだ外国人への理解が薄い。
外国人は東京、愛知県、大阪府、神奈川、
埼玉県に集中していて、田舎ではよそ者扱
いされる
- ・外国人が住みにくい
(日本語ばかり、移民の認定が厳しい)
- ・コンフリクト (衝突)
不法投棄による ごみ問題、駐車禁止場所、
深夜の騒音、文化やマナーの違い